

## 四国相馬霊場八十八ヶ所を巡る会、なま街道の基点から新木駅、

関東大震災と布佐出身の偉人岡田武松、  
皇居の大手濠緑地の「震災イチョウ」

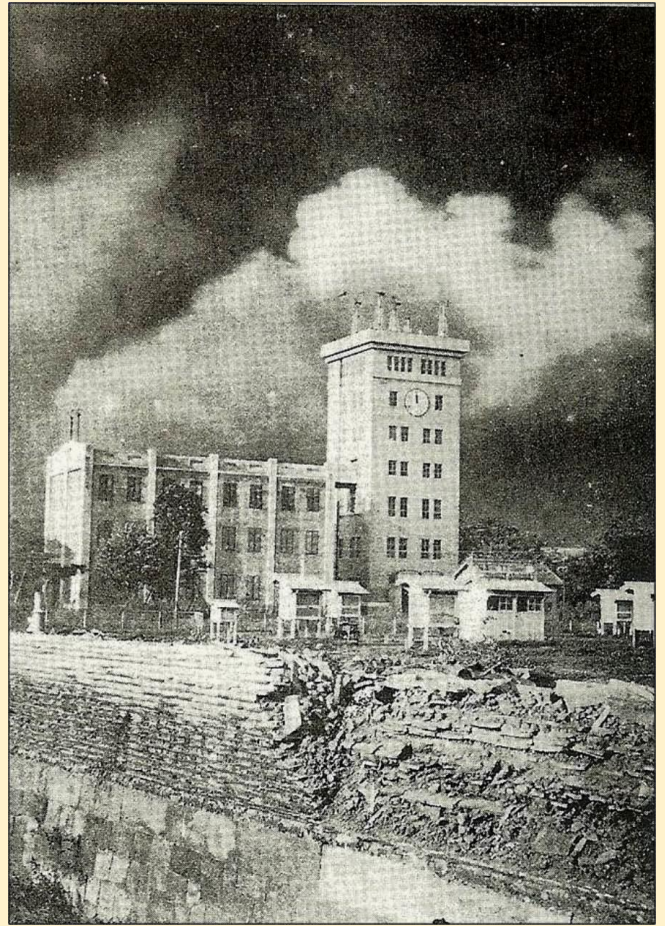


関東大震災の奇跡／被災者に生きる希望と勇気を与えるため  
大手濠緑地に岡田武松が残した「震災イチョウ」。

保存に尽力した岡田武松が、関東大震災時の中央気象台長で  
あったことが、直後の地震情報発表や日本の気象観測や地震研  
究の発展にとって、運命的に必然だったのではなかろうか。

千代田区大手町1丁目の旧中央気象台時計は、昭和40年代こ  
ろまで建っていたが、今は新たなビルに代わっている。

時計の針は地震発生時の11時58分で止まっていた。



柏の電気通信大教授だった頃の生徒に新田次郎がおりました、山岳小説は平成天皇もお気に入りでした。



### ← 気象学者 岡田武松 1874-1956

連合艦隊から大本営宛に打電された有名な電報「敵艦隊見ユトノ警報ニ接シ聯合艦隊ハ直ニ出動、之ヲ撃沈滅セントス。本日天気晴朗ナレドモ浪高シ」

### 新木の旧気象通信発信所

昭和13年(1938)に「中央気象台布佐出張所」として一般気象観測とラジオゾンデで高層気象データを収集していた。先ごろまでは南鳥島へ気象情報を送信したり、筑波山頂の観測機器を遠隔操作していたが、現在は気象公園として市民の憩いの場になりました。

また柏市旭町の「気象大学校」は少数精鋭主義で気象庁の幹部候補生を養成している。

岡田は全寮制の寮を「智明寮」と名付けて智と明の大切さを説き、昭和31年(1956)83歳で亡くなる寸前まで講師を勤めていました。

構内には高さ35mの東京レーダーが建ち、首都圏の気象観測の柱となっています。

### 日比谷公園のレストラン松本楼のまねき看板が我孫子にある理由



日比谷店(左)と尾張町本店の二枚の「まねき看板」が並ぶ。

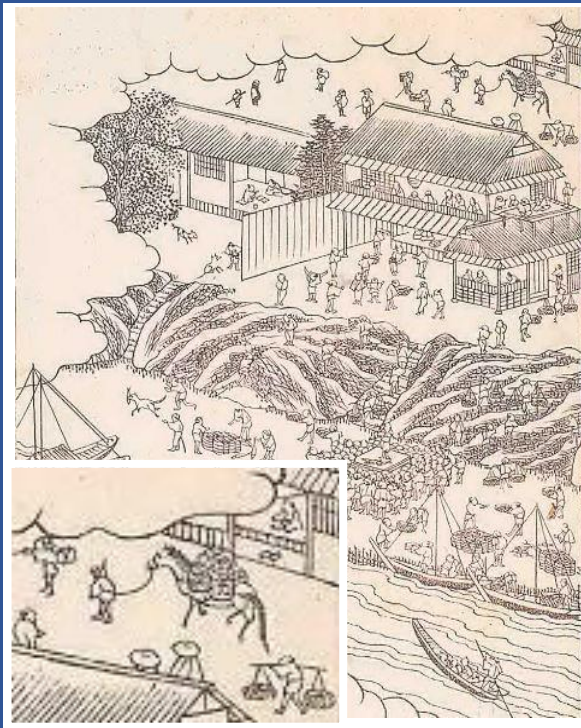
松本楼は東京市では大店の洋食レストランで、鮮魚の仕入れに布佐へ度々訪れていました。現在の日比谷パレスです。

毎年秋限定の「10円カレー」が有名で俳句の季語にもなっていた。我孫子駅前の花屋さんに、まねき看板はあったのですが、現在はあびこ電脳考古博物館(湖北公民館前交差点から北100m先)にあります。

我孫子市教育委員会所有



## なま街道の荷馬の様子



### 利根川図誌の部分図

赤松宗旦画「布佐栄河岸の図」に、なま街道の荷馬の様子が描かれています。図中の右角に荷を背負う馬の手綱を引く馬子の姿が描かれています。

なま街道は、陸路で鮮魚を松戸の江戸川迄片道 31Km を馬を引いて歩いて運びました。途中には川や湖沼があり、街道は勿論舗装されている筈もなく、荷車では幾ら馬でも引いて行けません。土や泥に車輪が取られて、それこそ「うまく運べない」でしょう。更に、大八車は幕末頃まで、江戸町内以外では禁止されていた様です。

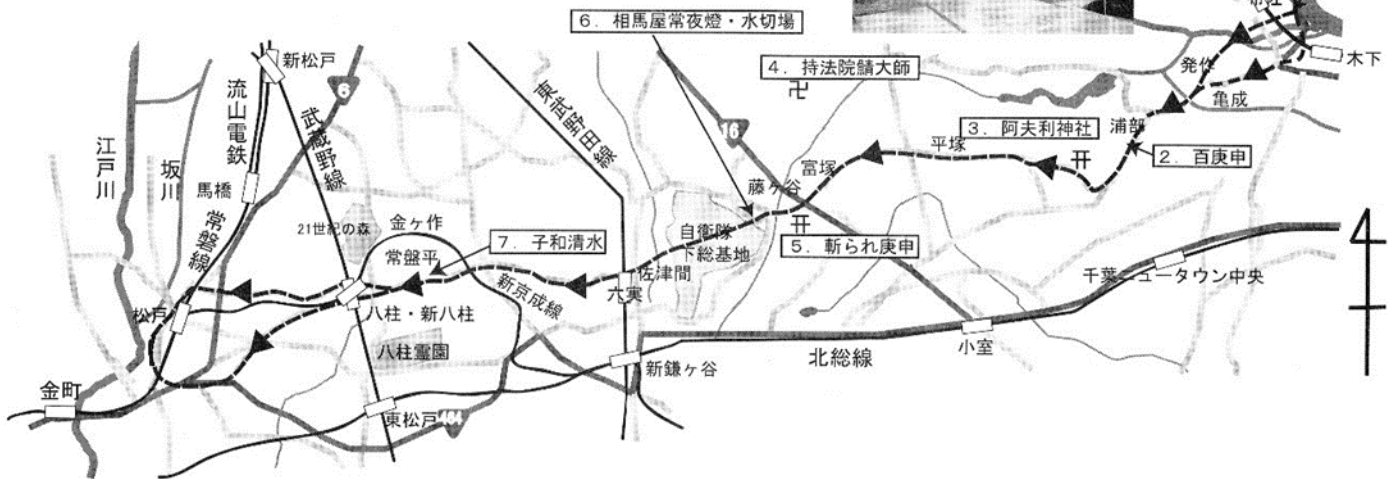
米なら馬一頭に一駄（二俵で百二十キロ）が普通、三俵（かんぬきという）、四俵（やぐらという）となると、強い馬でも四～六キロの距離しか運べなかったようです。

魚魚魚

なま、なまぐさい、等なま街道専用文字

## 鮮魚街道の地図

我孫子市教育委員会資料



## 四国伊予国平城山観自在寺の第40番霊場について。

明治4年までは篠山(ささやま)三所大権現が霊場でした。

「此山 南は蒼海漫々として天水つらなり東は高山かさなり雲常に起り西は千嶺めぐり九州目下に見ゆ 坂をのぼる事壱里也 大師のひらき玉ふと也 寺を観世音寺と名く本尊十一面長五尺。 山上は三所権現といふ熊峰の神にやわきに池あり中に矢筈(やはず、掛軸を掛ける棒)の形なる岩あり まはりにささ竹繁し靈異の事をいひ諸病に用ゆ皆験ありといふ 別して馬のやむによし 此所礼所の数とせずといへども皆往詣する霊境なり」

光音は金刀比羅社境内に写し勸請碑が建立されています。

元禄2年(1689)『四国徧礼霊場記』から

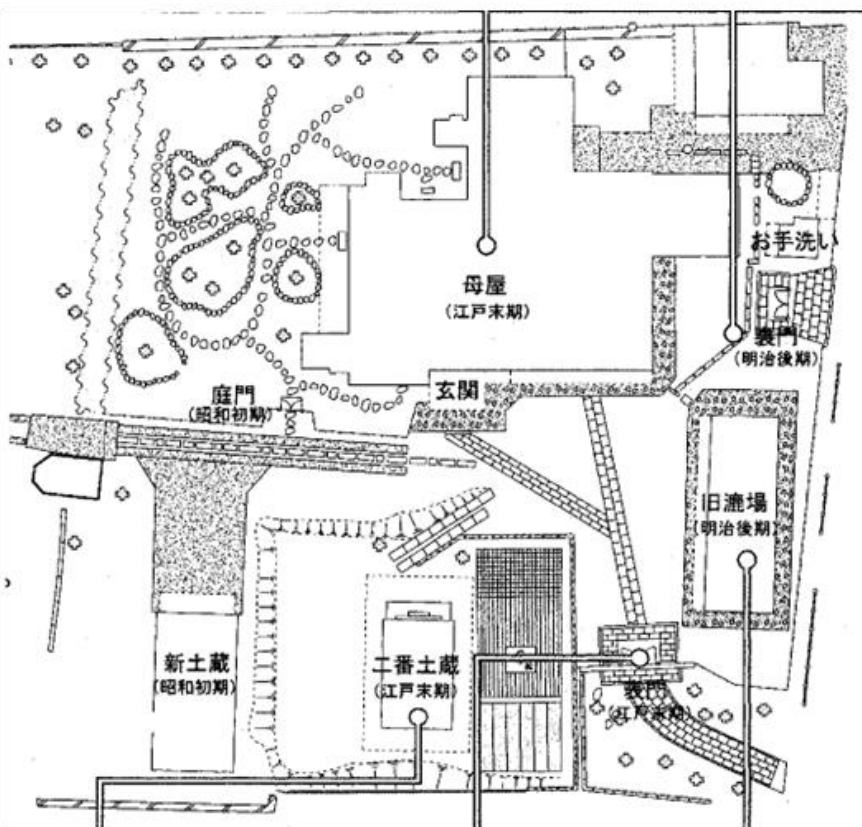




## 相島新田の井上邸屋敷図



井上邸の頃の土蔵



### 旧漕場(こしば)

敷地の道路に沿って建つ木造の平屋の建物、桁行七間半梁間二間半の東西の棟、屋根は入母屋造棧瓦葺、軒を出桁造(だしげたつくり)として南面に吹放ちの瓦葺庇(瓦屋根のひさし)を付けている。外壁は真壁造の白漆喰塗、腰を押縁(おしぶち=板などを押さえるため、その上から打ち付ける細い材)下見板張(真壁の外壁の土塗壁を保護するためにその上に張られることが多い)となっています。

井上家は、天保八年に書かれた家に設置する正月飾りの場所についての文書によると「こしば」にお飾りをしていることがわかることから、この時代には油の製造販売を行っていたようで「油濾し作業」を行っていました。

現在の「旧漕場」は、大正8年(1919)に建てられましたが大正15年に作成された「家屋届」によると、その時点では「倉庫」として登録されています。建築専門家によると「出桁造」は倉庫としては立派過ぎる構造のため事務所、作業場や作業を行う人の宿泊施設などとして使われていたのではないかという事です。

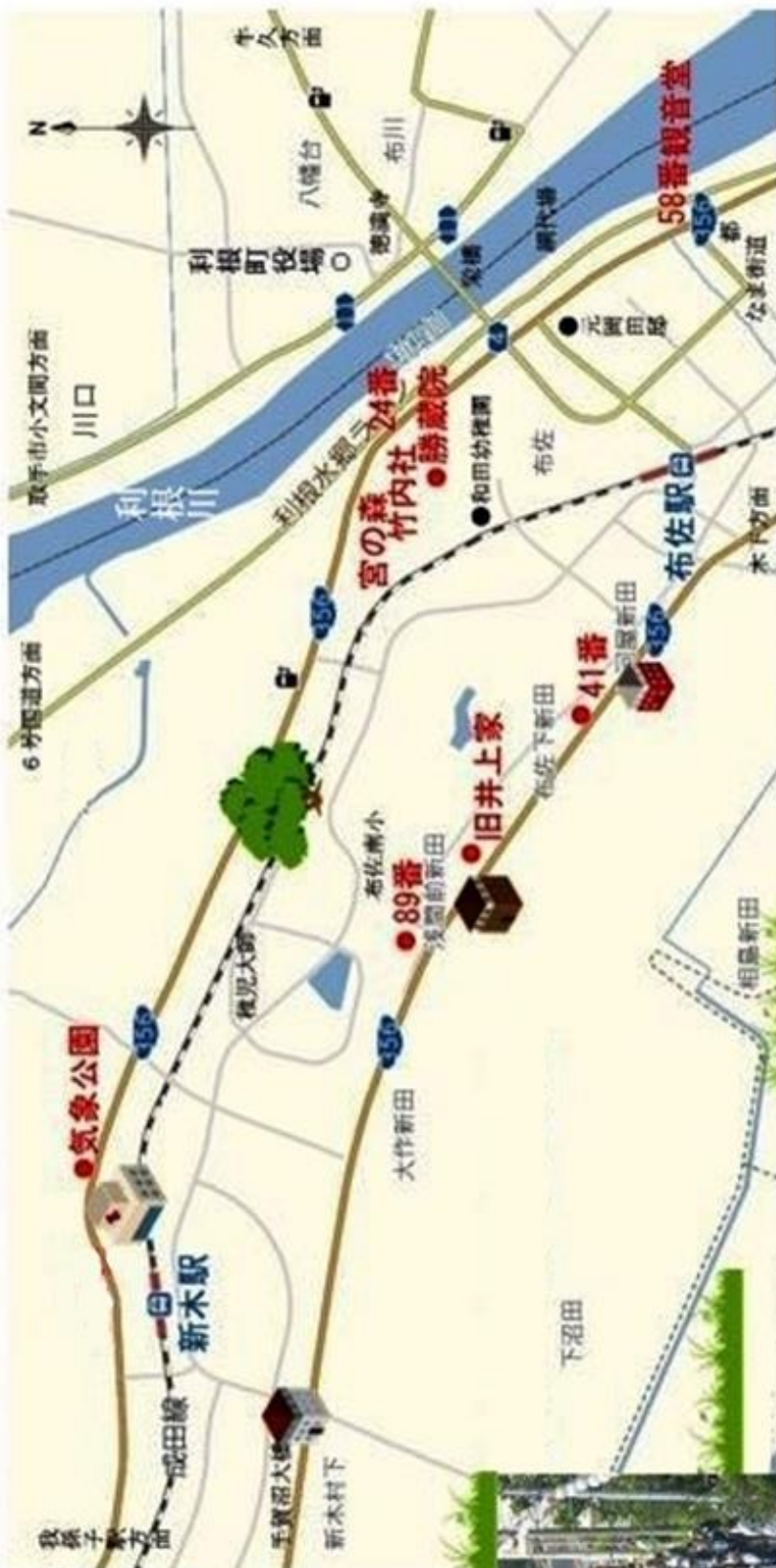
「旧漕場」と呼称している理由は、井上家の人々が古くから「旧漕場」と呼んでいたため、国の有形登録文化財、市指定文化財になった際もそのまま継承しています。

### 宮の森公園から第\*\*番札所への近道





開  
孫子  
布我  
佐新  
路遍  
お木



竹内神社  
の祭礼



# 新四国相馬霊場八十八ヶ所巡り

なま街道の始点から成田線新木駅

歩行距離約5.6km、(R)布佐駅〜新木駅間)

## 打始

### 第五十八番 都の馬頭観音堂

草創の年代は不詳です。明治3年利根川堤防決壊  
流失後、大正二年(1913)に現在の敷地に奉納され、  
観音堂と大師堂が移築されましたが、はじめは仮堂  
でした。観音堂は、昭和34年に新築されました。  
落慶(らっけい)は、東京築地の魚河岸の支援による  
ものでした。

**移し寺**、愛媛県玉川町作礼山(さいれいざん)仙遊寺

**ご本尊**、馬頭観音

駅送馬の慰霊のため問屋や馬主が建立し秘仏とし  
ていましたが、毎年4月21日に開帳されています。

**ご真言**、おんあみりとうどはんばうんばったそわか

**ご詠歌**、たちよりて作礼(さいれい)の堂にやすみつ

六字をとなえ 経をよむべし

「南無阿弥陀仏」の六字名号(ろくじみょうごう)を唱え  
御経を読み返すべし。

本尊とともに四天王(2体)、木造の六臂(ろっぴ)如  
意輪観音、土製の魚藍(ぎょらん)台座の灑水(しやすい)  
観音(水にお香を入れて作った香水をそそいで清め  
ること、流行り病時に観音様を祀り、※楊枝(ようじ)  
と灑水を供える風習などがあり、灑水観音は水難除  
けでここには漁藍台座など水に関係した仏像が多く  
祀られています。大師堂は大正十四年に新築された  
ものです。布佐河岸繁栄の往時を偲ばせる「東京魚

がし」と刻まれた手水鉢や鮮魚商関係者の寄進した  
石碑があります。

### 【仏教と楊枝】 釈迦の歯木(しぼく)のすすめ

梵語に「ダンタカーシュタ」という語があります。

「ダンタ」は歯、「カーシュタ」は木を意味するので「歯  
木」となります。細い棒の先端をかんで繊維を房状し  
て、歯と舌を掃除する歯ブラシの原形といえます。

歯木は仏教と深い関わりがあり、紀元前5世紀の仏  
教の開祖釈迦の弟子等に説いた仏典「律蔵」には、歯木  
についての教えがあります。

その序述には「その時、僧たちは歯木をかまず口臭  
が酷いため、世尊は歯木をかむことの五つを説く」

- 1 口臭がなくなる、
- 2 食べ物の味がよくなる、
- 3 口の中の熱をとる、
- 4 痰をとる、
- 5 眼がよくなる、

### 歯木から楊枝(ようじ)へ

仏教とともに歯木も中国に伝わります、その過程で  
歯木は「楊枝」と漢訳されました。理由は素材でした。

「楊」は柳と訳されました。中国で柳は何処にでもあ  
り、更に霊力が宿ると古来より考えられていました。

隋や唐時代には、歯痛を鎮めるために、ヤナギの皮  
をかんでその汁を歯になすりつけるとあり薬草木でも  
ありました。

4〜7世紀には法顯(ほっけん)、玄奘(げんじょう)、義  
浄(ぎじょう)等の僧が西域を旅し、楊枝と釈迦にまつわ  
る話を伝えています。

西遊記で有名な玄奘三蔵の『大唐西域記』には楊枝  
植生の逸話があります。： 釈迦が使い終えた楊枝を

捨てたところ、その楊枝から根が生え、たちまち大樹  
となったという、例え外道がその樹を抜き捨てても、  
すぐに生えてくるという。

華嚴経の浄行品(じょうぎようぼん)80華嚴経第11に、  
「楊枝を手に持てば、まさに願うべし。すべての生け  
るものが、心に正しい秩序を得て、自然に清らかにな  
るように」経典はさらに続きます。

「明け方に楊枝をかめば、まさに願うべし。すべての  
生けるものが、自己規制の能力を備え、もろもろの煩  
悩をすべてかみ砕いてしまうことを」

歯木即ち楊枝は、宗教的な意味合いを深め強調され  
るようになりました。

しかし、仏教の楊枝の教えを知る人は関係者位。

### なま街道と布佐河岸

大型で海洋を安全に航行出来るような造船技術が  
無かった近年までは、太海航路が無かったために、  
川路により銚子からの魚を江戸に運ぶには、利根川  
を関宿迄運び江戸川を下って江戸へというルートに  
なり青魚の鯖やアジは鮮度が落ちてしまいます。

更に取手から関宿の間の利根川は冬場水位が下が  
り舁下(はしけ)という小さな舟に荷を積み替えない  
と高瀬舟では浅瀬に乗り上げてしまい通行出来ませ  
んでした。

なま街道という陸路による松戸迄の馬による運送  
手段により、銚子の漁場から2日間で運び3日目の  
朝には江戸日本橋の魚河岸でセリにかけられるよう  
になりました。その搬送馬の数は数十頭にもおよび  
年間に四千〜六千頭の馬が松戸を往復しました。

このなま街道により布佐河岸は、なま街道の起点として、鉄道が開通するまで栄えました。

布佐河岸がなぜ「なま街道の基点」なのか、なま街道は、そもそも「付通し(つけどし)」といって裏街道でした、すなわち幕府が正式に認めた街道ではないということなのです。

布佐の隣には木下(きおろし)という河岸がありました、木下は幕府公認の河岸でした。木下街道は、現在でも県道59号線として行徳へ、なま街道は松戸へと一部重複しながらその道筋を残しています。

木下と布佐は漁業権では争いが絶えなかったようでしたが、幕府は河岸として豊かであった木下ではなく布佐に「なま街道」としての権利を認めました。

布佐の都にある相馬霊場第58番札所観音堂は、なま街道の出発地として、相馬霊場との密接な関係がこの「都」の地に残っています。

**網代場** あじろば 網代の地名は全国にあります。

布佐三丁目の北側と堤敷、河川敷、布川境にかけて、字名で網代場という地名が残っていました。

観音堂から前方の土手に上ると、上流に栄橋があり、対岸に赤色のコンクリート製の護岸があります、この辺りは利根川の川幅が最も狭いところで、この一帯は、かつて「網代漁獵」が行われていました。

鬼怒川や小貝川等と利根川の合流点は、茶の湯にわざわざ水を汲みに行く程、水が良質であったそうで、海から上ってくる魚が留まる場所でもありません。利根川の鮭は銚子口より上り安食辺りから味が良くなり、この辺に到ると塩気も抜け、魚も肥え脂も付き、肉も虹の様に赤くなり味が最高となったそ

うで、「利根鮭」と言われていたそうです。

利根鮭を捕らえる漁法に、網代と呼ばれる仕掛けを使う鮭漁は明治中頃まで行なわれていましたが、川幅全域に網を張る為、舟の水路を妨げるとして廃止されました。鮭の漁期は9月中旬から11月まで、鱒は4月5月9月10月が最盛期でした。

網代場は荷物の積み下ろしをする船着場でもあり、なま街道の出発地となっていました。

古来から、布佐は鮭と鱒の絶好の漁場で、古文書によれば、竹袋村、布佐村、中峠村、小文間村などが度々漁場争いをした記録が残っています。

「布川鮭」とも云われましたが、地名がつくのはまるで、新潟の村上鮭くらいで、さぞ美味しかったのでしょう、通常は河川名なので利根鮭といえます。

利根川の鮭は、毎年晩秋11月には、行田市の利根川に架かる武蔵大橋堤の魚道で、三千匹以上の白鮭(捕獲禁止)が遡上してくる姿を見られる様です。

### 布佐の渡し舟

布佐の渡しは、柏市布施の七里ヶ渡しに次ぐ、古い歴史を残しています、江戸時代中期に「取手の渡し」を含む水戸街道が公道として指定されるまでは、我孫子宿から牛久に至るには、利根川を越えるだけで、取手宿経由の利根川と小貝川の二つの川を渡るよりは便利で楽だったのでしょう。

更に利根川の川幅が狭い為、渇水時により布佐と布川間の利根川は、地続きに近くなるような時があったようです。柳田國男少年期の日記より  
布佐からの渡しは、2ルート以上あったようです

が、常陸への主たる渡しは、布佐と布川(現、新利根間)でした、布川からは、道仙田河岸、入地、龍ヶ崎市の若柴、牛久へと陸路で下ることができました。

取手への渡しもありました、江蔵地(布佐)と取手小文間の戸田井の渡しでした、お遍路さん専用の「大師舟」も昭和30年代迄ありました。更に面白い渡しとしては、布佐と布川、戸田井と江蔵地へ間の「三角渡し」という渡しが存在していました。

(一部、我孫子市史より)

布佐の渡しとは別に、渡しが我孫子市古戸にありました「神出しの渡し」といい対岸の取手小文間の東谷寺下に至る渡しでした、取手市史には「船頭さん」と呼ぶと、船頭が現れ、渡してくれた様子が記載されています。五条通りという古道があったとかまた、「出し」とは船着き場や棧橋をいいます。

戸田井の渡しは、取手市吉田の平本家所蔵の絵図面道案内に次のような記載があります。

「十六番札所カラ川口(小貝川河口左岸ハタシ、イそふし(我孫子市江蔵地)カラ五十八番札所へ)」

相馬霊場お遍路の順路としていたようです。

書籍「かしわ」には、北柏の大堀川に呼塚河岸の記載があります、宝暦期(1761~1763)には、呼塚手賀沼と千間堀(小型の舂下(はしけ)しか通れない)と竹袋(利根川出口)間の渡しがあり乗客の評判もよく重宝がられました、文政九年(1826)我孫子宿に支障が出て旅客扱いをやめさせられました。

この手賀沼のルートは、鮮魚運搬も行っており戸張河岸から、なま街道を松戸へと陸路のなま街道という役割を担っていました。柏市教育委員会より



## 都の河岸場から夜逃げした松尾芭蕉

俳人松尾芭蕉は「鹿島紀行」で布佐を訪れていますが、そのルートは江戸深川の草庵から市川、鎌ヶ谷と鮮魚(なま)街道と木下街道を北上して、布佐から鹿島へは利根川の舟旅のようでした。

芭蕉の日記には、こう記されています。

「日既に暮かゝるほどに、利根川のほとり、ふさといふ所につく。此川にて、鮭の網代といふものをたくみて、武江の市にひさぐもの有。

よひのほど、其漁家に入てやすらふ。

よるのやど、なまぐさし。月くまなくはれけるまゝに、夜舟さしくだして、かしまにいたる。」

貞亨四年(1687)八月 芭蕉44歳の鹿島詣でより。

「鮭の網代」とは、鮭を捕獲する網代場と漁法です。

「武江の市」の武江(ぶかう)とは江戸の意、市は日本橋の魚市場を指します。「なまぐさしく夜舟さしくだして」は、魚の生臭さに耐えられず寝られず、月明かりをたよりに、夜舟で逃げ出し鹿島へ向かう、と此の記述は「鹿島詣」紀行日記に残されています。

鮭(さけ)、しゃげの語源は「さくさくと裂ける」鮭の魚肉から「裂け」から「さけ」と言われています。

松尾芭蕉はこの後に奥の細道へ旅立ちました、

正保元年(1644)〜元禄七年十月十二日(1694)

## 第二十四番 求宝山医王院延命寺、真言宗豊山派、

かつては布川徳満寺の末寺でした。

**移し寺**、高知県室戸市

室戸山最御崎寺 (むろとさん ほつみさきじ)

**本尊**、文禄二年(1593)法隆寺から虚空蔵菩薩を迎

え祀っている。江戸時代後期までは薬師如来と虚空蔵菩薩の二体が本尊でした。開山は権少僧都忠変という。明治時代本堂焼失のため薬師堂に移り薬師如来を本尊としたが、明治37年以降は虚空蔵菩薩としている。明治の「寺院明細帳」に「古老伝説では虚空蔵菩薩像は行基の作で大和国法隆寺より文禄二年(1593)当寺開山の忠変僧都が西国巡礼のおり、お迎えして堂宇を建て安置し延命寺とした。」と記されています。

**御詠歌**、明星の出でぬる方の東寺

暗き迷は などがあらまじ

**御真言**、のうぼう あきやしやきやらばや

おんありきや まりぼりそわか

本堂は罹災し天明三年(1783)再建、明治15年には旧本堂の薬師堂が建てられ、昭和61年に改築されました。明治十年には庫裏(こり、境内にある住居や倉庫など)が再建されましたが、2004年9月近代的な建物に新築されました。

大師堂は昭和十年の再建で虚空蔵菩薩を本尊とし、両側に厨子に入った弘法興教大師像が祀られています、文政九年(1826)のもですが、平成時代になり、補修され、新たに彩色されました。

虚空蔵堂も明治37年の布佐の大火で類焼しましたが、昭和8年に再建されたものです。

近くの墓所には**岡田武松家の墓**があります。

昭和初期の頃、延命寺住職は俊雄散(しゅんゆうさん)という解熱剤を頒布されたと言われています。

**四国の移し最御崎寺について。**

最御崎寺は、「修行の道場」とされる土佐国最初の霊

場です。太平洋の白い波濤が吠えたる室戸岬の突端にあり、石塀家屋は台風来襲のメツカの象徴です。

黒潮のしぶきにあらわれて鋭角になった黒い岩礁。そのすさまじい響き、空と海が一体となり襲いかかる洞窟の樹下で、藤衣(藤重衣ではない)を被って風雨を凌ぎ、虚空蔵菩薩求聞持法の修法に励む青年がいた。

延暦11年(792)、空海19歳のころとされている。

この詳細は、大師が24歳のときの撰述『三教指帰(さんこうしいき)』に次のように記されている。

「…土州室戸崎に勤念す 谷響きを惜しまず 明星来影す 心に感ずるときは明星口に入り 虚空蔵光明照らし来たりて 菩薩の威を顕し 仏法の無二を現す…」  
**御厨人窟**(みくろど)という、大師が虚空蔵求聞持法の苦行をしたと伝えられる洞窟でのこと。

## 第二十一番 西光山勝蔵院(しょうざういん)境内

大きな堂が大正4年に竹内神社から移された第21番で、明治末の神仏分離令によって移されました。

**移し寺**、徳島県阿南市

舎心山大龍寺(しゃしんざんたいりゅうじ)、

**本尊**、虚空蔵菩薩

**真言**、のうぼう あきやしやきやらばや

おんありきや まりぼりそわか

**詠歌**、太龍の 常に住むぞや げに岩屋

舎心聞持は守護のためなり

数えで21才は、太平洋戦争時に於いては徴兵年令でした、徴兵除けや戦争に行っても無事帰還出来る様にとの青年の参詣が多かったと言われました。

21番札所は、布佐小学校校横の坂上にあり、札所開

基時は竹内大明神に建立されたものです。

大正4年に勝蔵院へ移されました。

昭和51年に罹災しましたが、昭和58年に再建されました。火災の時の焼け跡が一部残っています。

竹内神社については、5頁上段を参照下さい。

### 四国の移し太龍寺について

太龍寺の御本尊は「虚空蔵大菩薩」にて、弘法大師様の御作です。太龍寺は「西の高野」とも称されます。

弘法大師が19歳のころ、この深奥の境内から南西約6kmの「舎心嶽」という岩上で、一日間の虚空蔵菩薩求聞持法(ぐもんじほう)を修行されたという伝えは、大師が24歳のときの著作『三教指帰』に記されており、よく知られていました。

虚空蔵菩薩求聞持法は、真言を百万遍となえる最も難行とされる修法で、大師青年期の思想形成に大きな影響を及ぼしています。縁起によると延暦12年、桓武天皇(在位781~786)の勅願により堂塔が建立され、弘法大師が本尊の虚空蔵菩薩像をはじめ諸尊を造像して安置し開創した。山号は修行地の舎心嶽から、また寺名は修行中の大師を守護した大龍(龍神)にちなんでいる。是から一里程下れば龍の窟屋があります。

### 第三十七番 西光山勝蔵院、

もと印幡郡泉村泉倉寺末。文禄元年(1592)の創建。

移し寺、高知窪川町・藤井山岩本寺、

ご本尊、阿弥陀三尊

(観音菩薩を左脇侍、勢至菩薩を右脇侍)。

ご真言、おん あみりた ていせい から うん

ご詠歌、六つのちり五つのやしろあらわして

深き仁井田の神のたのしみ

開宗開基は不詳ですが寛永二年(1625)の検地で、寺の2反歩が除け地(よけち=免税地)になっていることから江戸時代には、寺院としてあったようです。明治の寺院明細帳には宝永二年(1705)中興開山法印孝順再建とあります。

境内には大師堂の他、聖観音堂、地藏堂があり、墓地には松岡家(柳田國男の旧姓、明治34年27歳で柳田家に入る迄は松岡姓でした)の墓石があります。更に、当地の名主を勤めた小山庄先祖の五輪塔は寛永年代(1624~1643)の石塔です。

第37番開基時の本尊は聖観世音菩薩でした、昔は本堂鐘楼脇にあったのですが21番が移って来た時に現在地に移されました。地元領主の小山家の墓塚が、大師堂から本堂に下りる左手に置かれています。


### 幻の布施城(和田城跡)と地名(和田)

わだ幼稚園の右手の車庫の脇を入って行くと狭い石段があり、樹の茂った小高い丘に出ます、その右手に和田城跡を示す明応二年(1493)の板碑(現在勝蔵院に)があり、後に五輪塔があります。鎌倉時代の源頼朝の腹心で和田義盛が鎌倉を追われ、その子孫がたてこもったという伝承でした。

しかし、この城名(和田)は、どうも文政二年に、勝蔵院の住職(覚道師)が言い出したことであって、中世板碑にあった明応九年四月という年記が和田氏と結びつき、古墳が和田城址への想像を呼んだという、左記に引用する『郡誌』の考証が正しい。

和田氏との係わりは捏造。

「布佐町の古墳」 大字布佐台字大塚の遺名あり、今古墳なれども其名に依て之を考ふるに、往時大古墳の存在せしことを推知すべし。和田前という処に一大古墳ありしを、文政二年開発せしことあり、とあります。手賀沼北辺郡誌。

文政二年の頃、そこより石槨(せっかく、棺)を掘り出ししに、中に長き刀銅佛と石一片有りき、その石に  和田氏墓、右傍に明応九年卒月日不知、文政二乙卯歳四月建之と鐫(彫)りて、和田八幡と称し布佐の正蔵院に祭りて有りと言々と記せり、大正七年十月就て之を見しに、尚碑の左側下部に、明

応九年四月は文政二年迄凡三百三十年に成る、裏面に現住覚道建之とあり。以上全て覚道の Fiction。思ふに和田氏墓碑石及其礎石が、凡て古墳(石槨)材料なるより見れば、此古墳は明応年度の如きものに非ず、所謂是れ布佐国造時代のものたるや疑なし、然るに土地(和田前)といふに依り、住職(覚道)の専断を以て斯(かかわ)る杜撰(ずさん)の墓表を偽造(いぞう)せんことは、返す返すも遺憾なりと謂ふべし、蓋し(けだし、確かに)明応九年とは、附近より発掘せし板碑の鐫字(せんじ)となりしならん、

「わだ」という地名は、全国各地に極めて多く見られる『小辞典』。

利根川沿いでは、『富勢村誌』に、和田沼という名が見え、「本村布施(ト)田中村花野井(ト)二跨ガル。沼南ハ一帯水田ニシテ、北方ハ草地ナリ。東西五町、南北三町三十六間余、面積六万四千八百十三坪、水



深約三尺、鮒、鯉、鰻、鯰(ナマズ)、鱈(ドジョウ)、小蝦及び藻草ヲ産シ、冬季ハ水鳥ヲ網ス。」

とある。また小貝川沿いでは宮和田、和田(いずれも、現取手市藤代)といった地名を見出すことは容易である。また、万葉の柿本人麻呂のうたに

「ささ波の 滋賀の大和太(わだ) 淀むとも

昔の人に 又もあはめやも」

とあるように、「わだ(曲)」は、

一、地形の入り曲がっているところ入江などという二、形が曲がりくねっていること

が、本来の意である『大辞典』。前記の柏市、取手市藤代の地名も、この本来の意のいずれかに起因することは、地図上で容易に確認することができる。

この字「和田前」および、これと隣接する字「和田前」は、これらの近傍の低地に「わだ」と称される川の曲流部、あるいは「わだ沼」と称されるものがあるが、これに因んで名付けられたものであろう。

しかも「和田前」という地名が、寛永の検地の時に既にあつたことを併せ考えると、布佐と布川の地狭部の開疎以前に、手賀沼の水を落す川がどう流れていたのか、また流れに沿って沼沢や湿地がどうなっていたのかを知る手がかりの一つが、地名となつて現代に残されたと言ふことができよう。

更に、字「和田前」に接する西新田における、度重なる水損は人工の新田開発に抗して行われた、大自然の復元の営みと解することもできる。

我孫子市史研究5より

竹内神社、祭神は天之迦具土命(あめのかぐつちのみこと)、日本武尊、武内宿弥命(たけのうちのすくねのみこと)を合祭しています。

もとは愛宕八坂神社の一角に祀られていました。

### 【以下伝説】

ある日、布佐村の森田多衛門が畑で麦を刈り取っていたところ、急に雷鳴が鳴り、翌日来て見ると一夜にして竹が生え、畑の中に白蛇がとぐろを巻いていました、そこで愛宕神社の神託を受け、竹内社をこの地に遷したのでそうです。

享保二十一年(1736)に、正一位竹内大明神の神位を受けました。

祭礼は9月中旬、3日間にわたっておこなわれ、山車5基と御輿が出て掛合う様は相馬地区屈指の盛大なお祭です。

布佐が河岸として発展したため境内には「船持中」による水天宮、「日本橋魚河し」による、御手洗(みたらし、みたらい)石のある稲荷社があります。

右手の社殿は神明神社です。

他に、柳田國男の三兄弟と地元出身の名士の建立による、日露戦争旅順(りょじゅん)陥落記念の英文の碑があります。

### 宮の森公園、休憩と厠

#### 布佐と湖北の著名な人々

神明神社と御嶽神社の裏手から布佐小学校の校庭を横切りカラー模様の階段を下りて行くと、途中に明治35頃、柳田國男の長兄で医師の松岡鼎まつおかなえが、名望家に呼び掛けて五千冊の図書を集め

て図書館とした「布佐文庫」の説明板があります。布佐文庫は現在、布佐図書館に保管され一般利用されています。

柳田國男(やなぎだくに)お、明治20年医師で後に布佐町長や千葉県医師会長を務めた兄の松岡鼎家は、柳田國男が青年の頃寄宿した家でした。

病院は最近まで凌雲堂(りょうんどう)医院として継がれていました。屋敷は現存しています。

利根川対岸の利根町に柳田國男記念公苑に資料館があります。民俗学者。

#### 「椰子の実」、島崎藤村 歌詞

名も知らぬ遠き島より 流れ寄る椰子の実一つ

故郷の岸を離れて 汝(なれ)はそも波に幾月

旧(もと)の木は生(お)いや茂れる

枝はなお影をやなせる

我もまた渚を枕 孤身(ひとりみ)の 浮寝の旅ぞ

実をとりて胸にあつれば 新たなり流離の憂

海の日の沈むを見れば 激(たぎ)り落つ異郷の涙

思いやる八重の汐々

いずれの日にか故国(くに)に帰らん

この詩は、明治31年(1898)の夏、一ヶ月半ほど伊良湖岬(いらこ)、愛知県田原市にある太平洋と三河湾を望む渥美半島の先端(せんたん)に滞在した柳田國男が浜に流れている椰子の実の話を藤村に語り、藤村がその話を元に創作したものです。

伊良湖の恋路が浜は白砂の海岸で、南からの黒潮暖流がぶつかり、更に北上します。この黒潮に流されて、常夏南国の何処からか椰子の実が流れ着いたのでしょう。「海上の道」で日本人の渡来を説く。

岡田武松邸、地元人に「博士の家」と呼ばれた住居は無くなり近隣センターとなっています。

明治32年東大物理学科卒業後、中央気象台に入り予報課長時代に日露戦争が始まりました、日本海海戦時の海域の様子を「天気晴朗なるも波高かるべし」と予報しましたが、東郷連合艦隊司令長官はその予報文を大本営への打電そのまま引用したそうです。

その後、中央気象台長と東大教授を兼任、大正13年イギリス気象学会からサイモンズ賞を受賞。

志賀直哉、谷崎潤一郎、鈴木大拙と共に昭和24年文化勲章を受章しました。

昭和31年享年82、布佐の自宅で亡。

新木にあります岡田武松が関わる気象送信所は現在、気象台記念公園として姿を変え広大な敷地は有効利用されています。

また柏市旭町の気象大学校は少数精鋭主義で気象庁の幹部候補生を養成しています。

新田次郎は青年時代に、布佐気象送信所に勤務していました。登山好きの平成天皇明仁殿下が愛読する作家として知られる。気象学者で山岳小説家。

孤高の人、劔岳点の記、八甲田山と聖職の碑

赤松宗旦(そうたん)、文化三年(1806)

二代目赤松宗旦義知は布川に生まれ、天保九年(1838)に布川で、産科医であった父赤松恵の医院を内科医として再開業した。

宗旦は、安政五年(1828)、利根川流域の歴史や生活、伝説・地理・物産等を描いた「利根川図志」を

完成させた。文久二年(1862)、57歳で没しています。布川(利根町)に赤松居宅が保存されています。

大澤岳太郎教授別荘、蘭玄(せんげん)荘跡

江蔵地の丘陵に、東大医科大学解剖学大澤岳太郎教授(明治33〜大正9)の別荘がありました。

「秋は正に肅々と深まり夜しんしん松葉は玉色に光る。尽きる事の無い自然の美しさ、ひれ伏す想いがするということか」

彼はユリア夫人(ドイツ人のフランクフルト望郷のため)にこの土地を選びました、小貝川との合流地点と筑波山を望む風景は利根川沿いの名勝地でした。夫人は昭和16年にこの地で亡くなりました。

第四十一番 稲荷神社、

祭神 宇賀御霊(うかのみたま)命、

倉稲魂(くらいなたま)命。

ご本尊は十一面観世音菩薩と稲荷明神。

他に三峯神社、水神宮、天神宮、阿夫利神社(祭神は、大山祇命(おおやまつみのみこと)、雨乞いの神)。

青面金剛など他にない大きい石像石碑などがあります。

移し寺、愛媛県三間町の稲荷山龍光寺、

ご真言、おんまかきやろにきやそわか

ご詠歌、この神は三国流布の蜜教を

守らせねわむちかいとぞきく

四国霊場の龍光寺の御本尊は「十二面観世音菩薩」、脇侍は不動明王、毘沙門天にて何れも弘法大師様の御作であります。此の寺には稲荷大明神が観請して

あります。

布佐稲荷社の社殿は、相馬霊場創設以前の明和安永期(1764)に創建されたものと思われます。

手賀沼に拓かれた広大な新田の産土(うぶずな)の神として勧請されたといわれ、左手にある「敬神愛郷」の碑によると稲荷神社は宇迦之御魂神を主祭神として猿田彦神(さるたひこのかみ)と天鈿女神(あまのうずめのかみ)を併せ祀ると記されています。

「宇迦之御魂」とは古く食材特に稲霊(いなだま)を意味する言葉で、「稲荷」の語源は「稲成」すなわち「稲の生成化育する様」をいう言葉から来たようです。

神像が稲を背負っているところから「稲荷」の字が当てられたとあり、中世から近世にかけて工業が興り、商業が盛んになると「殖産興業の神」として神徳が広がったのでした。

この地域の農民は手賀沼の水害防除や干拓開墾の事業の起工式をこの神前で行なったそうで、平成元年に拝殿、会(あい)の間が改築されました。大師堂は昭和9年の改築です。

旧井上家住宅、(15頁に屋敷図と土蔵写真掲載)

相島工房と呼ばれていました。

相島という名は、享保年間、江戸から手賀沼干拓に下向した際、この地域が下総国相馬郡であったため、その「相」と、江戸の居所地が豊島郡(とよしま)ごおり(江戸、武蔵国品川)でありその「島」を取って相島としたものです。

相島の名称は周辺にもいくつか残っており、印西市の相島六軒、旧沼南町には東相島、西相島という



名称の地があります。

井上家は、近江の油商人で製造卸業者でした。

邸内東北側の建物は、油瀧場(こしば)を建直したもので、代々「旧瀧場」と呼んできたそうです。

嫡男は代々井上佐治兵衛を名乗ってきました。

三代將軍家光の代に春日局の弟、小田原城主の戸田氏とともに江戸に出たといわれています。井上家3代までは江戸尾張町二丁目(現在の銀座6丁目)名主の職にあり、江戸城に食料品を納める御用商人でしたが、4代目は享保の改革(きょうほうのかいかく)八代將軍徳川吉宗が主導した諸改革で、在任期間(1716-1745)の年号に由来する(3)に合わせて、御用商人の地位を捨てて、手賀沼干拓に乗り出しました。

この事業は、千間堀(千間堤)を構築し、手賀沼を2分し、後に下沼と言われる東半分の比較的浅い部分を水田化し、残りの上沼を沼として残すきわめて大規模な難工事でした。

この干拓は結局未完に終わりましたが、井上家はここに残り、手賀沼「落とし堀」の事業を鷲之谷(現沼南町)の染谷家、今井家とともに地域の組合自普請として行いました。

時代は明治に移り、名主の制度はなくなりましたが廃藩置県で郡県制がされ、後に11代は郡長に任ぜられています。12代井上二郎は藤代本陣横瀬家の次男として生まれ、井上家の養子として入りました。

東京帝国大学工科大学土木学科卒業後、全国各地の官民の土木施設の建設に当たりました。日光東照宮の神橋架け替えも二郎の業績といわれています。

その後、役所を退職後手賀沼干拓に着手し相島新

田、浅間前新田の干拓を行いました。井上邸南正面の水田に記念碑が残されています。

2018/03/02`TV`東京「開かずの金庫」で紹介されました。西郷どん(南洲)の自筆掛け軸や貝の灯籠などを教育委員会のT氏が案内していました。金庫の中身は大正時代の手紙や領収書でした。

### 下手賀沼

手賀沼は平仮名の「つ」の字形をしている、柏市布瀬に、つの字の下半分の小さい手賀沼が湖沼としてあり、その畔の地名が「布瀬」で、布施弁天の布施とは漢字一字違い、更に、平将門に由来する地名の「岩井」がある、茨城県板東市岩井と同名です。

ここには、将門神社があり、隣接している龍光院には、将門の娘如蔵尼(にょそうに)が父の菩提を弔ったという地藏菩薩が祀られています。

その縁起については安永三年(1784)に彫られた版木によって知ることができます。

### 第八十九番 我孫子市布佐の浅間(せんげん、仙元)

神社、番外。正保二年(1645)六月鎮座。

宝暦13年(1763)の布佐村の村鑑には「浅間宮、別当勝蔵院、御除社地長六間横五間壱ヶ所」と「免田八畝歩」の記載がある。

**ご真言**、おん ばきりゆう そわか

**ご詠歌**、八十や九によろずの願い 富士浅間

大師の恵み 深き手賀沼  
桜井正男氏奉納で額が掛かっています。

新四国大師霊場は、本国四国の各霊場の御詠歌が

移されており第89番は無いので、相馬大師霊場としては唯一のオリジナルのご詠歌になります。

言い伝えによると光音禪師が八十八ヶ所札所を全部造り終えて浅間神社の下を通りかかると「光音、光音」と呼ぶ声が聞こえるのだが、人の気配がないので、再び歩き始めると、また「光音、光音」と呼ぶ声がします。光音禪師はこれは弘法大師が此処に札所を造れと命じられたものと思い、89番を開基したと云われています。

安永四年(1775) 笹山権現(※)を勧請、開基。

**御祭神**、木花咲耶姫(このはなさくやひめ)の逸話。

「天忍徳耳(あめののおしのほみみ)の子、番仁岐命(ほのにぎのみこと)にぎは、高天原から日向に天下ったとき(天孫降臨)に笠沙の岬で美しい少女に出会います。乙女に名を問い求婚するにぎに、女は「私からはお返事できません。父の大山津見(阿夫利神社)の祭神で雨乞いの神(あめ乞ひ)がお答えるでしょう」と言う。早速、使者を送ると、大山津見はたいそう喜び、姉の磐長姫(いわながひめ)を添えて献上した。

ところがにぎは、姉のあまりの醜さに畏れをなして、妹だけを側に置き、姉の方は送り返してしまふ。それを恥じた大山津見は「もしも二人の娘と結婚していたら、あなたの命は石のような不動性と花のような繁栄を同時に手にすることができた。

しかし、ひとり咲耶姫だけを留めたので、天つ神の御子の寿命は花のように短くなるだろう」と言う。それ以来、天皇の寿命は限りあるものになったのだ、と古事記は語っています。

## 浅間社と富士山信仰

「浅間」は九州の阿蘇山を意味した原始信仰で、次に富士山や浅間山や蔵王などの火山の総称として「あさま(浅間)」といわれました。しかし、大和朝廷は訓読「せんげん」と読ませました。

また、あさまは、東南アジアの言葉で火山や温泉に關係する言葉であり、マレー語では「アサ」は煙を「マ」は母を意味するそうです。

坂上田村麻呂が富士山本宮浅間大社を現在地に遷宮した時、浅間大社の湧玉池(わくたまいけ)の周りに桜が多く自生していたことにより、桜と關係の深い伊勢の皇大宮(こうたいぐう)の撰社(せつしゃ)である朝熊神社を勧請しました。この朝熊神社を地元の人々が「アサマノカミノヤシロ」と呼んでいたため、その名を浅間社にあてたとする説が有力です。

「浅間」は火山鎮火の神木花開耶姫命(仙元大日神)を祀る御社が多く、江戸時代には富士山と浅間山は一体の神であるとして祀られました。

特に富士山は日本一高い山と、神の火山として信仰の対象となり、富士信仰は全国に広がりました。

観音光音禪師が第89番を建立したのも、安永5年9月の噴火後であり時代が重なります。天明大噴火は有名ですが光音の死後十年後近くになります。

**長谷川角行** (かくぎょう)、天文10年1月15日(1541/02/10) ~ 正保三年六月三日(1646/07/15)は、江戸時代に富士講を結成した人びとが信仰上の開祖として崇拜した人物。

当初修験道の行者であった角行は、常陸国(一説には水戸藤柄町)での修行を終えて陸奥国達谷窟(悪路

王伝説で著名)に至り、その岩窟で修行中に役行者よりお告げを受けて富士山麓の人穴(静岡県富士宮市)に辿り着く。そして、この穴で4寸5分角の角材の上に爪立ちして一千日間の苦行を実践し、永禄3年(1560)「角行」という行名を与えられる。

その後、角行は富士登拝や水垢離を繰り返しつつ廻国し、修行成果をあげるたびに**仙元大日神**より、フセギ(病魔退散)や御身披(おみぬき)という独特の呪符や曼荼羅を授かった。なお、フセギは、特に病気が平癒に効力を発揮する呪符であったらしく、江戸で疫病が万延した際にはこれを数万の人びとに配して救済したという。此処の浅間は富士講寄りといえる

## ※ 笹山権現と四国霊場

**予州笹山権現**、愛媛県南部の笹山(ささやま)

愛媛県と高知県の県境に位置する標高1064.6mの笹山は、古くから山岳信仰の霊地として知られ、頂上には笹山社が鎮座しています。

4月下旬から5月上旬にかけては、アケボノツツジやシヤクナゲの花で山一面が埋め尽くされます。

## 笹山社(山腹)

笹山権現は用命天皇の勅願により開山しました。

平城天皇の大同年間には弘法大師が来山し、天下泰平五穀成熟と祈願したという遺跡もあります。

往古は笹山三所大権現と称していたが明治四年神社と改称しました。明治四年迄四国88霊場でした。

## 稚児大師堂、馬頭観音堂境内の稚児大師堂

(ちごだいし || 空海幼少時の真魚(まお)の像)、

石神堂(しゃくじどう、神明神社)。

布佐台は布佐の中心で古くから集落があり牧馬が行なわれていたと考えられ、馬頭観世音が祀られたものと思われています。石造物の中に「願主浄念」などあり、さらに大師堂の石標に「寮坊主出所布川馬場」と刻むものなどが散見され、ここに寮があり堂守が居住していたと考えられ、無住廃寺ではなかったと思われませんが「布川」は川向うで場所が違う？

安永九年(1780)に伊予金光山仙龍寺写とされているが、35番は青山の無量院に開基されています。

更に、観音光音が勧進した訳ではありません。

大師堂には石の大師像があり、下の台座に「観音光音法師(禪師ではない)、施主・了通法師、出所・布川馬場(現利根町)、文化四年(1807)卯月三月」と刻まれています。いろいろと疑問を抱かせる大師堂です。

掛所(かけしょ)だと言われていますが光音禪師は「かけしよと言われるところは存知あげず、御勝手にまいられし候」とあります。

御掛所とは浄土真宗で言う、本寺の出帳所のような堂寺院をいいます。「掛所」は辞書にないのですが、浄土真宗の親鸞に関わる三条院別院は有名です。

## 「気象台記念公園」

昭和13年に気象送信所、気象庁予報部無線通信課気象送信所庁舎が開設されました。

開設当時の気象通報は重要な機密事項となっており、特に昭和5年から始まった中国との15年戦争は、米国との交戦をなかば覚悟したもので、空爆に耐えられる、耐空爆建築物でした。



その広大な広場は、憩いの公園となっています。

## 打止

### なま街道による経済効果

「温故知食」第四回千葉県北西部文化財発表会より。  
千葉県北西部文化財行政担当連絡協議会の主催で、2005年7月18日に浦安市郷土博物館のエントランスホールで行われました。

発表会のプログラムの「鯖、都へ」の発表と新四国相馬霊場に関連がある展示物を拝観し拝聴してきました。発表者である我孫子市教育委員会社会教育部文化課のT氏の展示会場での展示物と説明は、新四国相馬霊場に関する事柄に絡み、新たな歴史事実と「なま街道」という鮮魚を運ぶ専用街道の社会的経済効果の発表でした。

「鯖大師」我孫子市柴崎円福寺には相馬霊場大師堂の隣に鯖大師(さばだいし)が祀られています。

海の魚である「鯖」が、なぜ海から70 Kmも離れた我孫子市にあるのでしょうか。

江戸幕府は利根川の東遷という大事業を行いました、東遷により江戸の町への水害を防ぐのとともに、千葉や茨城の農産物と銚子沖での魚介類を水路によって早く江戸へ運ぶという「江戸一極集中」の経済効果も含まれていました。

鯖大師は、鯖大師万人講のような講が寄進したものが多く、我孫子市柴崎の円福寺にある鯖大師は明治時代に東京の魚河岸市場の仲買人等による寄贈であったようです。相馬霊場は講によって発展した霊場です。

### まねき看板

昭和30年代迄の我孫子駅前には待合所があり、みなど屋には「まねき」看板がありました。まねき看板は店舗内に飾られていたようです。

この当時の新四国相馬霊場は、プチ霊場として3日間程で89箇所の大師霊場を巡る事ができるため、相馬霊場と東京からの交通の利便性の良さで、江戸からはなま街道や水戸街道、布施弁天に通じる諏訪道(うなぎ街道)を利用して相馬霊場は大いに賑わいました、明治29年常磐線の開通により更に賑わいましたようです。

特に、両国や神田の魚河岸や料理屋などは大師巡礼を何度も訪れた大店(おおだな)は常連の証として「まねき」という看板を多数、我孫子に残しました。

東京の日比谷公園にある、松本楼のまねきがあります、松本楼は日本での喫茶店第一号です、今は毎年9/25に行われる十円カレーで有名な仏蘭西料理レストランです。平成25年現在。

松本楼と相馬霊場の関わり、新たな発見でした。「相馬霊場」と「なま街道」による、江戸という大都市の影響による取手や我孫子にもたらした経済効果は、「まねき」看板に代表され、鯖大師信仰に繋がります。

### 鯖大師伝説

四国お遍路で土佐国(高知県)の最初の札所第24番最御崎寺のお遍路途中に別格第4番鯖大師本坊があります。ご本尊は鯖を下げた大師立像です。

鯖大師の教えは本来、歴史年代順では行基菩薩な

のですが、四国では弘法大師の教えとされています。

この資料では、行基に纏わる鯖伝説を紹介します。これは江戸時代前期の貞享4年(1687)に宥弁という僧によって書かれた四国遍路最古のガイドブックである『四国遍路道指南』(しこくへんろみちしるべ)に記載されている伝説です。

これに拠れば、行基が四国を巡錫(じゅんしゃく)している時ある地を訪れた際、鯖を馬に背負わせた馬追が通り懸かりました。行基が鯖を所望したところ、馬追はこれを断ちました。行基はこれに対し「大坂や八坂坂中鯖ひとつ 行基にくれで馬の腹や病(や)む」と歌を詠んだのでした。

すると馬は急に腹痛で動かなくなりました。困った馬追は行基に鯖を差し出しました。

今度は「大坂や八坂坂中鯖ひとつ 行基にくれで馬の腹や止(や)む」と、「くれで」を「くれで」と一文字変えて詠むだけで、馬の苦しみは治まりました。行基が詠んだとされるこの歌は、四国霊場別格四番八坂寺では空海が詠んだとされました。

鯖大師は、全国の海や河川湖沼地に広がりました相馬霊場は、利根川沿いにあり食料魚の仕入れ先として江戸の大店は我孫子や取手を訪れる際、お大師巡りに大勢のお客を連れて来たと思われれます。

### 新四国布川組八十八ヶ所

文化十五年(1808)三月、布川(現・茨城県利根町)徳満寺に布川新四国霊場開創法要が営まれた。

この布川新四国は、文化年中に東金山の大見川安右衛門が、地域に弘法大師四国霊場を開くことを決

意、四国巡拝を三回ほど繰返し、各霊場の記録とお砂を頂戴して帰ったが、志をはたすことなく三十有余歳にして鬼籍へと旅立った。

この安右衛門の遺志を長竿村兵右衛門新田の法印山本卓栄が継ぎ、諸人に四国八十八ヶ所の開創について熱心に勧誘したが、あまりの熱心さが誤解を生んでいった。

法印の空を拒むごとき努力を見ていた田川の糸賀与左衛門および北河原の石山市郎兵衛が共に協力を申し出て、三人で賛同者を得るために奔走するかたわら、近郷近在に名僧として知られる布川の真言宗豊山派海珠山徳満寺十九世恵燈上人に指導を仰いだのが文化十一年(1816)であったという。

恵燈上人の指導のもと常総二州北相馬稻敷、南相馬印旛の十七ヶ町村にまたがる三十余里、六日間の巡拝行が決定、徳満寺において開創法要が執行されたのは文化十五年三月のことでした。

巡拝の大導師は恵燈上人が勤め、幹事および世話人はこれに従い、業を休みし善男善女数百人が参集弘法大師の遺徳を感謝し、上人をはじめ山本卓栄、糸賀与左衛門、石山市郎兵衛らの努力をも追慕しつつ、その歴史を地域に刻み付けたのでした。

この新四国は「布川八十八ヶ所」あるいは「布川組」と呼ばれるが、正式には「布川組講国教会」と称し、「布川組」はその略称であり、本部を徳満寺に置いている。徳満寺は元龜年間(1570~1573)に裕誠上人によって中興、今日の門前に建立されたが、慶長の乱(1600)に滅亡した布川城主豊島氏の城跡である現在地に再建した。

徳満寺には、建長五年(1195)銘の金銅板の「両界曼荼羅」があり、願主像慶弁、藤原延次作のこれは国指定の重要文化財として東京国立博物館に収蔵されている。徳満寺の創建は、推測するに同年を中心とする前後数年の間であると考えられよう。

赤松宗旦の『布川案内記』による徳満寺は末寺二十六を有すと記され、第七世隆鎖(りゅうばん)が元禄年間(1688~1703)に六波羅蜜寺から移したと伝えられる法印湛慶(たんけい)作の七尺三寸の地藏菩薩が祀られ、俗に「子育て地藏」と呼ばれて、年に一味、一日のみ御開帳があり、これに集まる人々を目当てに「市」が立った。

また、ここには、生れて間もない幼児を母親が我が手で絞め殺す「間引き」の絵馬があつて、わが国民俗学の祖といわれる柳田国男をその道に導くきっかけを作ったという。

この絵馬の奉納は、「水飲み」と称せられた小作農民の極貧による間引きをする悪習慣をなくすことと、生を受けた命を殺さざるを得なかった親の懺悔と子供の供養に納めたものであるが、これは、男達への反省を求める女達の苦渋の絵馬ともいえよう。

## 魚(なま)街道、

2011年10月15日の実施記録より抜粋  
観音堂は利根川の旧網代場(都)に建っている、堂裏に「なま(鮮魚)街道」の案内板がある。

慶安三年(1650)頃から馬の背荷物による鮮魚輸送の出発地で、当初は行徳(塩田)へ運び小名木川運河

で蔵前に運んでいたが、河川越えが多いため馬から舟への荷積替えの手間を減らすために、享保12年(1727)頃から松戸の江戸川小向の渡しに運び、行徳を経て蔵前の魚河岸へと河川越えの少ないルートに変わっていった。片道31.6km、馬の背荷物だと約12時間。翌日の朝には日本橋河岸で売られていた。帰りは行徳の塩などを運んだそうです。

7年前に30名の参加者と「R」成田線布佐から3日かけて松戸迄歩いた時の記録の抜粋です。

【地図参照】我孫子市教育委員会より使用許可済「なま街道」は、布佐起点だけではなく、他に利根川七里の渡しの布施河岸から流山の加河岸「鰻街道」とも言った、手賀沼の船戸迄船で、同じく手賀沼呼塚河岸迄同じく船でというルート、馬の背荷物で運び松戸迄、などもなま街道といった。

馬の背荷物の様子は、赤松宗旦の「利根川図誌」に描かれている様に、馬の背中に一駄(米俵二俵を両サイトに振分けて固定した姿で運んでいました。一駄半(三俵)では一里程しか運べず荷馬も重労働、荷車であれば沢山の荷を運べるのだが、沼や河川では車輪が泥などにとられ、うまくないのです。

### 1 布佐観音堂

なま街道の基点で出発地、網代場河岸、  
「R」成田線の踏切を渡り、印西市発作(ほつきく)手賀川の関枿(かんすい)橋を渡ります。  
墓参に来た若山牧水の歌碑。

発作集落は集落側の旧道沿いに大杉神社と大師堂  
印西大師第36番がある。



旧道は県道59に合流する、坂を南下すると永治小  
学校があるので裏側の谷地に降りると、日本三井の  
一つである鎌倉「星の井戸」二本松「日の井戸」と  
並ぶ「月影の井戸」がある。県道に戻り先へ。

## 2 百庚申

天保十年の一と二と三月廿四日の庚申塔だけが並  
ぶ、百庚申が道沿いに並ぶ。

道左側のセブンイレブンがある辺りから阿夫利神  
社の鳥居の辺りまでの県道右側の小さな堀は「印西  
牧の野馬除土手」の跡です。

## 3 阿夫利神社

大鳥居を潜ってしばらく歩くと右側に神社がある、  
銚子沖の海中の石であったという、2つの石尊が祀  
られている。暫らく歩くと平塚集落の入り口に、右  
側に道標があり「西 松戸 東京道、東 白井道」と刻  
まれている。道標を右折し旧船戸の平塚へ向かう。

普登山蓮華院延命寺、寛文八年(1668)建立の観音  
堂(県重文)がある、本尊は十二面観世音菩薩。

この寺は弘法大師を祀る准四国柏大師八十八ヶ所  
の一字になっており、毎年5月1日から五日間「送  
り大師」が行われお遍路さんとともにお大師さまが  
背負われて訪れて来ます。准四国柏大師霊場第84  
番札所。ここから更に船戸の手賀沼近くに、国重要  
文化財の滝田家住宅があります、現在も居住されて  
おられるので事前に観覧申請を白井市役所へ行う必  
要あり。富塚で打ち止め

## 4 持法院(彼岸花の寺)鯖大師、

登慶山如意輪寺持法院、天台宗、(今回は未巡拝)  
国道210をを折立交差点まで移動して、航空自衛

隊基地方面に進みます。交差点先の右の角に、昔の  
「水車屋」という店の跡が廃墟と化している、富塚  
の鳥見神社へ、佐原方面に行く道で「銚子街道」と  
も言われている。

## 5 切られ庚申、

富塚鳥見神社本殿の境内、本殿には随所に壮麗な  
彫刻が施されています。特に庇柱(ひさしばしら)は、  
龍が巻きつく意匠が一本から見事に彫出されており、  
県内でも類例が少ない。

壁面の羽目板には全て廿四考を題材にした彫刻が  
なされている。

境内にある、切られ庚申の石造の逸話。

昔、銚子から富塚を通り松戸に向かう道を「なま  
道」と呼んで、魚を運ぶ鮮魚師(なまし)たちが大勢利  
用していました。

ある晩、一人の鮮魚師の男がいつものように富塚  
にさしかかると、何やらおかしな気配を感じはじめ  
ました。やがて火の玉が鮮魚師に向かって飛んでく  
るのに気づき、男は怨霊にとり憑かれると思い、恐  
ろしさのあまり持っていた刀で斬りつけてしまいま  
した。手ごたえを感じたのだが刀は折れてしまい、  
男はその場で気絶してしまいました。

目が覚めると、そこには刀傷を残した庚申塔が建  
っており、どうやら誤って庚申塔を斬りつけていた  
ことに気がついた。

その後だれとなく、この庚申塔を「切られ庚申」  
と呼ぶようになり、通行の安全を祈る人々のために、  
なま道の脇に立ち続けていましたが、いつしかそん  
なことも忘れ去られて、鳥見神社の境内に移された

と云います。西に向かつて藤ヶ谷に入る。

## 6 相馬屋常夜灯、水切場、

柏市指定文化財の有名な鮮魚街道常夜燈で「紀元  
2539年6月設之」と銘記されており、明治12年に  
地元の有力者などによって建立されたとのこと。

またこの付近には茶屋などもあったそうです。

柏市には、大規模な常夜灯が呼塚、布施と河岸場  
への分岐路に多くあった様です。

相馬屋はなま街道の中間地点であり、鮮魚の蘇生  
で水に戻した所を「水切り場」といい、生け簀(す)が  
もうけられていました。

陸上自衛隊下総航空基地の北側を迂回して、六実  
駅の踏切を渡り高竈(たかお)かおかみ、(たかお)神社へ。  
私達が訪れた時、全員びっくりお接待されました。

高竈神社の「露」の字は、おかみと読みます。

京都鞍馬の貴船神社奥院には、高竈神(たかおかみのか  
み)を祀っており主祭神です。しかし高竈神社とは言  
いません、貴船社は舟神宮として、玉依姫尊が黄色  
い船で辿り着いた地で、奥院は元の本宮です。

神社裏手の「野馬土手木戸の碑」土手を歩く。

五香駅を通過、武蔵野線の新八柱駅方面へ。

## 7 子和清水

水切り場です、案内板によると昔、酒好きな老人  
が住んでいて貧しい暮らしなのに外から帰るときは  
酒に酔っている。息子がいぶかってあとをつけてみ  
ると、こんこんと湧き出る泉を手で掬って「ああう  
まい酒だ」と言って飲んでいました。

父が帰った後息子が飲んでみるとただの清水だっ

た。この話を聞いた人々が「親はうま酒、子は清水」と言うようになった。

松戸小向河岸へは2つのルートに分かれ、**元武蔵野線**新八柱駅、千葉大方面と、二十世紀公園、北松戸方面がありました。松戸小松の渡し場においては、荷物を夕方前に船積みを終え、翌日早朝には日本橋河岸で競りにかけられ、江戸人の食卓に並びました。鮮魚を江戸に卸していたのは、常陸国や下総だけではありません、埼玉や群馬も競争相手でした。

相模国や内海(東京湾)の向い側の上総国からも、江戸へ運ばれ、相模国においては、なま街道より交通面で有利だった筈です。

### 文巻川河口開削後の利根川合流部の想像図

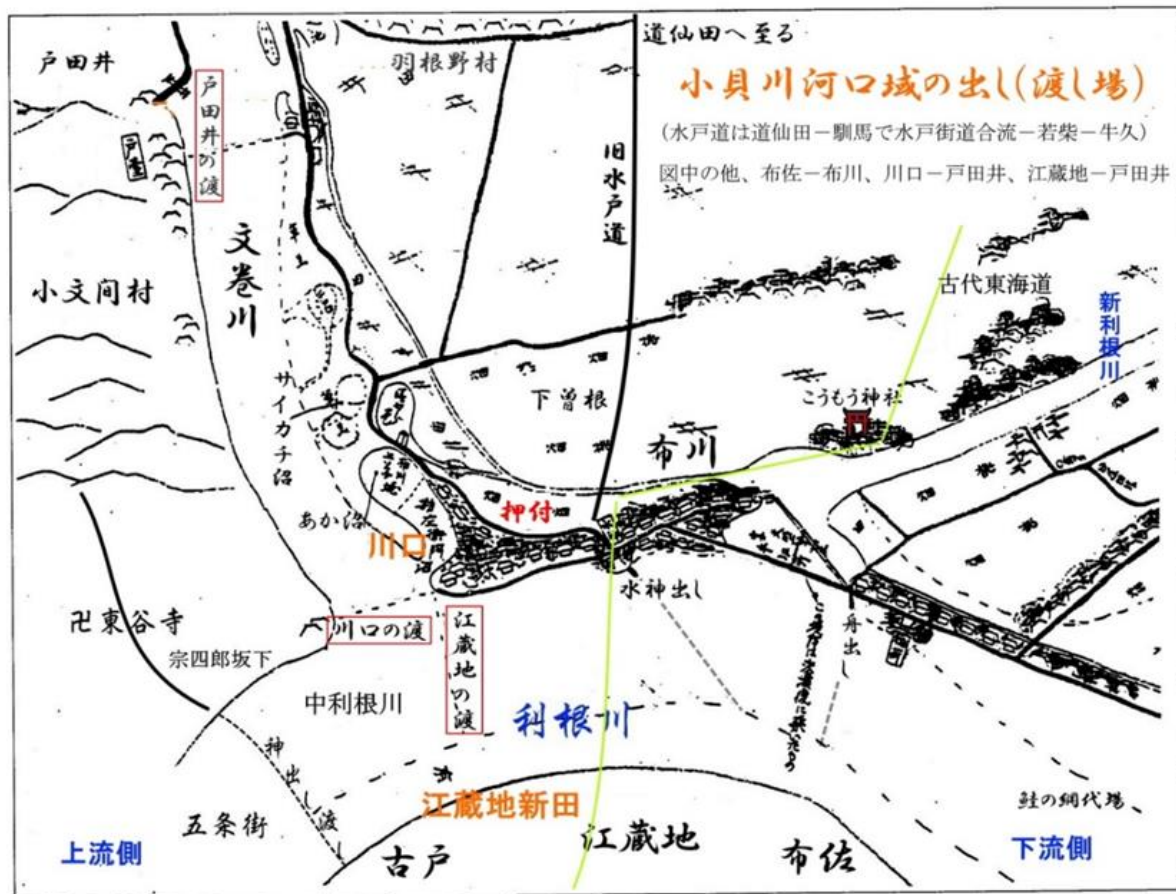
文巻川(小貝川)は、利根川との合流が現在の新利根川であったため、河口は35km先の霞ヶ浦でした。

この頃は、香取海の佐原辺りが河口となります。

寛文6年(1666)、新利根川として分離、小貝川河口を戸田井から一直線に開削して押付で利根川に合流させました。弘化4年(1823)頃には戸田井(川口)河岸がありました。小貝川には河岸場が非常に少なく、その理由は、鬼怒川と小貝川が合流していた石下と水海道の低地帯が影響して、小型舟しか通過することが出来ない、さらに河川の蛇行が酷く運行が難しいという実情によるものでした。

なお、此の地図では利根川が湾曲して描かれています。実際の流れは直線です。また、新利根川の位置も利根川本流に河口がありますが現在は小貝川に河口があります。網代場も川幅が広すぎではない

かと思えます。(元図を細工せずに掲載してあります)  
2020年3月、コロナ感染規制でお遍路を中止した  
晴れた日に、河口近くの土手桜を見に行ってみまし



た。桜の並木は満開でお花見客も見られました。  
河口の周りは芦原で人家は全くなし「此処に河岸  
などあったのか」と疑う程の自然一杯の風景でした  
川岸迄行くと「鮭の頭」の骨が

石ころと一緒に転がっていました。  
た。野生動物の仕業でしょう。

道仙田、小貝川下流唯一の河岸

小貝川は蛇行が非常に多く、  
河川氾濫が度々ありました。

更に絹川との合流地は浅瀬  
で小型船しか通れず、河岸場  
が出来なかった。

蛟蛸(こもも)神社、関東最古の  
水神様。

五条街、相野谷川河口部から利  
根川下流河岸部に残っていた  
街並みの痕跡。

小文間物語、郷土史家

餐場芳隆著 崙書房  
大正十二年小文間に生、令和  
2年5月没。

新四国相馬霊場を巡る会  
2024年4月改 記